芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6-3

記念祭特集号

初の全員参加

静かな展示会場

▽▽▽▽▽▽▽

今年の記念祭は九月二十九日から、十月三日の五日間に渡って行なわれた。四日目の講演会は、パンチのある若々しい言葉の連続であり、芦高生の耳を引いていた。そして今年初めての試みとして、全員参加の自治会展が催された。テーマは〝青春—同世代の若者たち〟という身近なものが取り入れられた。

△△△△△△△

記念祭第二日目の九月三十日、本校の中館・南館に於いて、今年のメインイベントとも言える自治会展が催された。

昨年の自治会展は、「生きる」というテーマに基づき、原爆展を行なった。広島から資料を運んだり、芦屋市民会館に会場を設置し記念祭期間中一般公開をするなど、大規模なものであった。しかしテーマが抽象的すぎて生徒達に浸透せず記念祭中にテーマを意識していた人は少なかった。又一般生徒は参加しなかった。

そこで今年の自治会展は例年と異なり全員参加という形式になった。さらに、テーマを「青春—同世代の若者たち—」と身近なものに決め、各クラスへの浸透を図ると共に、芦高生に考える機会を与え、クラスの団結を強めることに焦点が絞られた。

展示内容は、芦高生の意識調査、他校へとったアンケート結果や校風の紹介。また、外国人や働いている人を始め、芸能界の同世代にまで、目を向けているクラスなど様々だった。しかし展示形式は、ほとんどのクラスが模造紙に書いて掲示しており、映画・演劇などの工夫の見られたクラスはわずかだった。

執行部は、各クラスの自治会展実行委員と常時連絡を取ったり、パンフレットを印刷するなど、意気込みが感じられた。しかし、執行部展は、もう一歩手が回らなかった様である。芦高の歴史を取り上げていたが、もっと深く考えてみるべき問題である。〝ただ芦高の年表を掲示しただけ〟という印象をうけた。もっと執行部ならではの主張をして欲しかった。

自治会展を見た人に感想を求めたが、「あまりよく見ていないのでわからなかった。」という答えが多かった。また、「全員参加することは良かったと思う。映画などに取り組んだ所は、クラス全体でやっていけたけれど、掲示をしている所は係の人だけがやったという感じ。それに掲示ばかりでは誰も見ない。」という厳しい意見もあった。

結局、自治会展の最大のポイントである〝考える〟ことは、どっちつかずの状態だった。展示を見ていた人は、自分が興味を持つ所だけ見る。自由参加のクラス展示だけを見て帰った人も多いことだろう。文章離れが叫ばれている現在の高校生にとっては、仕方のない現象なのだろうか。

異例の自治会展ではあったが、課題の一つのテーマの浸透は果たせた。しかし自治会展の意識を理解している人が少なかったことは大きな問題である。

部説

本来の目的は？

第三十四回記念祭が終了した。あまり華やかさは見られず、静かに終ってしまったように思われる。そして、例年と違い〝全員参加〟ということで、注目されていた自治会展も地味だったせいかもの足りない感じがした。そこで目に付いた点を検討してみよう。

まず、発表の方法が工夫されておらず、ほとんどのクラスが教室に模造紙を張り巡らせただけの〝白い掲示〟に終ってしまった。せっかく興味ある問題に取り組んだにもかかわらず、工夫のない発表のお陰で生徒から敬遠されたクラスもあったのではないだろうか。見る側にしても、同じような発表形式ばかりでは興味も半減する。通りがかりの生徒を引き留め、入場者記録用紙に署名だけを頼んでいた掲示のクラスもあれば、急いで座席を確保しなければ座れないといった映画のクラスもある。もし「…」にするのならクラスも…まさに対照的だった。

発表の方法もさることながら、日程にも問題があったように思われる。クラス展示が自治会展と同じ日に並行して行われたことだ。テーマに沿った自治会展の閑散とお祭り的要素の強いクラス展示の盛況。この二つを見て〝本当にこの状態でテーマが浸透したのだろうか〟そんな疑問を持った人もいることだろう。

もし、日程が延長されて、この二つの展示が別々に行われていたら、ゆっくりと各クラスの展示を見ることも可能であったし、それらについて考えることもでき、テーマの浸透も、もっと深まっていたのではないか。

しかし、自治会展本来の目的は〝クラスの団結を強める〟ことで、結果に到る過程が重視されるのだ。いくら盛況に終っても、クラスが団結していなければ失敗であり、閑散としてはいたが、クラスが団結できたのなら成功なのである。

現在のクラスの状態を見て欲しい。自治会展で強められた団結が今も生かされていれば、そのクラスは成功に終ったといえるだろう。

輝く汗・体育祭

去る九月二十九日、曇りがちな天気の中で我芦高の運動場に於いて、記念祭の開幕祭及び、体育祭の開会宣言が行なわれた。

運動場には白いラインが引かれ、各クラスのデコレーションが並び、似顔絵もあればアニメ・童話に出てくる絵まであり、父兄の方々の目を引いていた。今年は、デコレーションが復活して二年目のせいか、デコレーションを立てる手際も良かった。

まず初めの演技は、全校生徒による芦高体操である。不揃なところが少し目立ったが、芦高だけの体操だけに、体育祭の代表演技にはふさわしかった。団体種目などでユニフォームには、クラスの個性があらわれ運動場を華やかにしていたがせっかく作ったユニフォームも、応援席にもどると脱いでしまう人がいた。又、運動部員は役員として忙しそうに走り回っていたが、他の生徒達は他のクラスに行ったり、辺りをうろうろするという人が少なくなく、非常に残念であった。

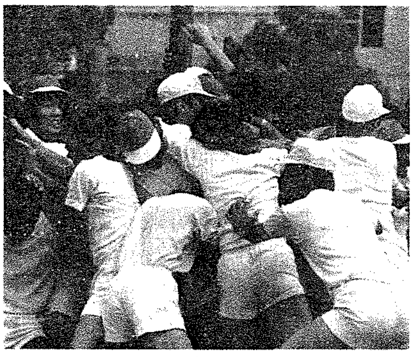
昼の部にもなると、青空も広がり、ちょうど良い暖かさであった。そして、運動部行進である。各クラブそれぞれのユニフォームを着て、キビキビとした行進を見せ、体育祭の一つの顔ともなった。リレーは、運動場の土が滑りがちなせいか、メインのクラス対抗リレー決勝では、さすがみんながみんなせりあって、勝負を譲らなかった。応援席もこれが最後とばかりに、一つになって応援するクラスや、必死になって声援を送る人もいた。さて、日頃の成果は発揮できただろうか。

最後は、全校生徒の行進で締め括りである。閉幕式では成績発表が行なわれ、優勝者には賞品、賞状が授与された。生徒達は皆、しんどさにも負けず、体育祭の閉会宣言を告げるまでけじめをつけ、記念祭の第一日目を飾った。

‖結果発表‖

総合成績
一位　一—B
二位　一—I
三位　三—G・二—D

100メートル
男子　西尾耕喜
女子　仲　玲子
200メートル
男子　古家幸晴
女子　畑中恵子
1000メートル
柳　秀雄


写真は体育祭の棒倒し

熱演・川村ひさし氏

川村ひさし氏の講演会は記念祭第四日目に行われた。小雨が降る中ではあったが、体育館いっぱいに並べられたイスは満席となった。十時になると、拍手の中、川村氏が姿を現わし、それから約一時間半にわたって講演が行われた。テレビやラジオの司会、またDJの仕事をされているだけあって、私達を引きつける話ぶりであった。音楽の話しを混じえて、御自分の青年時代の話や、芸能界の事をおもしろおかしく話された。

川村氏は本校卒業後、関西学院大学に進み、のち音楽雑誌の編集者を経て現在に至る。芦高十七回生で今年三十九才だが、この日も赤いスタジャム・ジャンパーを着ていらしてとても若々しく感じられた。

私達は、例えるなら大きな井戸を掘る時、また大きなビルを建てる時の準備段階に当たると言われた。

大きなことをするには、下積みを多くする必要があり、今はその基礎を固める大切な時期である。「目上の人にいろいろ言われても大きい気持ちで、余分なことは聞き流すように構えて欲しい。これから自分は大物になるんだ、という心意気でいって欲しい。」とおっしゃった。

また、失敗することは誰にでもあることなので、失敗を恐れてはいけない。「失敗するというのは自分が動いていることで、失敗しないということは、自分が、何もしていないから。」大切なのは失敗するかしないかではなくて、失敗したあとの自己責任が問題になる。失敗を最少限に抑えることが大事なのだと言われた。

印象深い言葉では、人の良い所の真似をして、ずっと続けていくうちに、自然に自分らしさというものが出てきて、また、他の人が自分の真似をしていくものだ。だから、若いうちにはできるだけ人の良い所の真似をするとよい。と、いわれたことだ。

この日は、午後から閉幕祭のアトラクションのオーディションが行われた。川村氏も特別審査員として参加された。オーディション会場の大教室に入られる所を我々出版部は、以下のようなインタビューをしてみた。

まず久しぶりの芦高について聞くと、「まだ校舎などをよく見ていなくてわからないが、卒業して二十年たった気がしない。」と言われた。次に、今年のテーマ、「青春、同世代の若者達」について聞いてみた。「現在地球に生きている人すべてが、同じ世代だ。と、いうぐらいの大きなスケールで考えてほしい。同世代というと、普通、同じ年の人で生活環境も似ていて、共通点が多い人のことだと思うだろう。しかし、年の差なんて百パーセント関係なくて、せせこましい考え方はしないでほしい。」というお答えだった。最後に、芦高生に対して望まれる事はというと「若いうちにいろいろ苦労して、本当にほしいものを得る努力をして欲しい。それと今から世の中に役立つこととは何だろうと考えて、世の中にかかわっていくトレーニングをしていってほしい。」と言われた。オーディションが始まる寸前でとてもお忙しい中、また廊下で騒しい中ではあったが、大変親切にお答え下さった。

ご自分の同級生のことを話されながら私達に、「ハードルを飛ぶのに百ある人は百で飛び、二十しかない人は二十出したことでそのハードルはもう飛べている。自分ができるだけのことをすればよいのだ。そして弱い人間にはなるな。冷たい人間と思われたとしてもそれを乗り越えていかなければならない。つらいと感じるのは生きている証拠なのだから。」と熱心に語られたことには、納得せざるをえなかった。

川村氏は、我々と二十才ぐらいも異なるが、話のわかる先輩という感じで、とても親しみやすい印象をうけた。

裏表独語

一日一日寒くなるこんな時期、布団恋しさに朝なかなか起きることができず、遅刻をする人が大変増えてくる。誰でもそうなのだろうが、朝起きてから学校の通用門を通って教室のいすに座るまでの時間というのは、実にあわただしいものである。（どうせ、遅刻や…と居直ってしまえば、それまでなのだが…）

家が、学校に近い人ほど遅刻すると、よく言われている。家の遠い生徒、特に電車やバスなどの交通機関を利用している生徒は、途中で何が起こるかわからないので、もしもの時の為に、少し早いめの電車、バスに乗るから、少々早く学校に着くのである。しかし、最近では、そう言い切れない様である。というのは、家の遠い近いにかかわらず、多くの生徒が、八時三十五分の予鈴から四十分の本鈴までの五分間にギリギリで、登校してくるのである。ただ〝とにかく本鈴に間に合えばいいんだ〟と、思っているのだろうか。確かに、本鈴には間に合っているのだから遅刻ではない。しかし始業時間ギリギリに座席についたおちつきのない状態で、一時間目の授業がどれほど頭に入るだろう。もともと予鈴として鳴るチャイムは、授業開始五分前を知らせると供に、一時間目の授業をうける体勢を、つくる事を知らせるものではないのか？。今のままでは遅刻防止の時報にすぎない。

せめて三十五分の予鈴ぐらいは、教室で聞ける様にもう少し早く登校してほしいものだ。

（ケムム）

×　×　×
×　×　×

文化部公演

一年間の結晶

ルナ・ホールで十月一日に行われた文化部公演は、日頃あまり活動の目立たない文化部にとって、最大の発表の場だったのではないだろうか。前日のリハーサルがうまくいかなかった部も、本番は練習の成果が発揮できたようだった。

＝コーラス部＝

プログラムのトップを飾ったコーラス部は、せり台に乗って記念祭歌を歌いながらの登場だった。

〝肩の張らない、親しみやすい曲を〟と言うことで選曲されたのが、オフコースのヒット曲「さよなら」。ほとんどの人が知っている曲で、一緒に口づさんでいる生徒もいた。また独唱の部分があったためか、普段耳にする曲とはかなり違った雰囲気に仕上がっていた。

合唱組曲は、〝マザーグースの五つの歌〟とし「ソロモン・グランディ」「にわのことりが」などを歌った。この中で、整然としていた列が急に崩れ、みんなが踊ったり、走り回ったりする場面があった。さすがに見ていた生徒は驚いていたが、コーラス＝聞かせるもの、に今年は〝見せる〟という要素を加えていたようだ。

＝E・S・S・＝

英語劇は、O・ヘンリー原作の「Christmas Presents」が演じられた。この作品は、「賢者の贈り物」という日本題もあり、クリスマスの時期にはテレビなどにもよく登場する。

〝英語では、やはり理解しにくい〟という声が例年聞かれていたが、今年は場面ごとに、あらすじを日本語で説明し、よりわかり易いように工夫されていた。

＝邦楽部＝

一曲目は「箱根八里変奏曲」が演奏され、日頃ほとんど耳にしない琴の音が新鮮に感じられたためか、熱心に聞く生徒も多かった。

二曲目は「渚のアデリーヌ」と「パンドラの箱」。ピアノの演奏とはかなり違った感じで、琴の独特な音色が印象的だった。最後は「胡笳の歌」で締めくくった。

＝ギター研究部＝

昨年は時間等の都合で、公演に参加できなかったギター研究部。今年は午前の部は行われなかったが、午後はかろうじて参加できた。演奏されたのは「We're All Alone」、「Help」、「カサブランカ」の三曲で、普段は、グループ単位の活動で、各バンドがそれぞれのカラーを出して演奏している。しかし、今回のように部員が一つになって演奏してみるのも良いのではないだろうか。

＝放送部＝

今年の放送劇は、マルシャーク原作による「森は生きている」が行なわれた。

内容は、女王が出した命令のために、マツユキ草を捜す娘、マリーと十二月達との話。

出演者は、全員が一年生だったが声がよく出ており言葉もはっきりしていた。日頃の発声練習などの成果が十分に発揮されていたようだ。

＝演劇部＝

「真贋の淵から」を演じた演劇部。夏の合宿が大成功に終わり、自信をつけたためか、演技は昨年よりずっと良くなったようだ。

昨年は、受験戦争を風刺していた劇だったが、今年はテーマが難しいこともあり、わかりにくい部分もあった。しかし、訴えるものが強かったためかテーマを感じとる事ができたのではないだろうか。

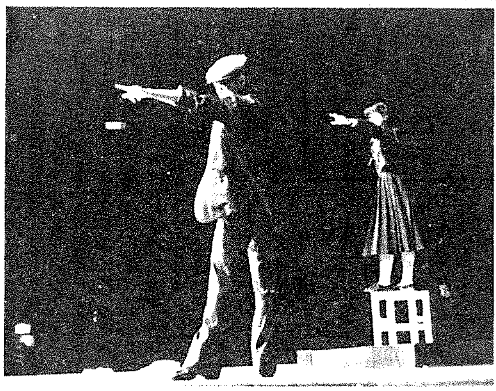
終始、真実か為りかがわからないどんでん返しの連続で、考えさせられる劇であった。

＝吹奏楽部＝

昨年に引き続いて取りを務めた。地区大会では金賞を獲得し、県大会に出場するなど、十分な練習を積んで充実していたようだ。

CMでおなじみの曲「追憶のテーマ」で始まり、「ライズ」「愛のテーマ」などが演奏された。曲と曲との間に掛かる声援も熱が入っていた。最後はアンコールの拍手に答えて数曲演奏され閉幕祭のアトラクションを期待させながら公演を終えた。

× × ×



◀写真は熱演する演劇部

文化部展示

広い視野を！

川村ひさし氏の講演会の後、午後一時から文化部展示が公開された。見に来る生徒が少なかったようだが各部の部員達は、自分の部の展示を見てもらおうと、勧誘に必死のようだった。

邦楽部では部員以外の生徒も琴を弾いていた。

ギター研究部では、大教室で公演が行われた。ここでは文化部公演と違い、バンドごとのコンサートで、教室内に入りきれないくらいの人が集まっていた。

鉄道研究部では、もう恒例となっている鉄道模型の展示で、すごく精密にできていることが印象的であった。その他にも、いろいろな駅の写真などを展示していた。

落語研究部では、早くも一年生が出演していて、かなりのにぎわいを見せていた。また先生方も多く見に来られていたようだった。

写真部は、中館一階で二つの部屋を上手に使用し、部員達が撮って現像した写真をパネルにして、展示していた。また、展示するだけでなく、どの写真がよかったか、選んでもらったりして、工夫を凝らしていた。この他にもカラースライドを上映していたが、中でも一番人気のあったのは、トリック写真のようだった。

地学研究部では、あのプラネタリウムを改造し、展示した他、天文、地質、気象の様々な分野に渡って多種多様に作品や写真を展示していた。

民族学研究部は、結成して間もない上、今回が初めての展示という事ではりきっていた。

放送部は、階段教室を使ってステレオ・コンサートを行っていた。教室内には壁や天井いっぱいにポスターをはり、ポスタープレゼントなどのアンケートをして、会場をより一層楽しませてくれていた。

茶道部では、恒例のお茶会を開いていた。男女問わず茶室には、招かれたのかつれてこられたのかわからない人でいっぱいだった。日頃しない正座は、客人にとっては、つらい時間であった。

しかしながら、その中でも一番人気があったのは、アマチュア無線部の所である。そのほとんどがマイコンのゲームや相性診断に集中していたようだ。現代では、マイコンが一般家庭にあっても珍しくないほど普及していて、以前よりも高性能、小型化されて扱い安くなっているのが人気のある原因だろう。しかし肝心のアマチュア無線に関するものには、あまり人気がなかったようだ。

また、将棋部では将棋大会の出場者が多く、部外者同志で熱戦を繰り広げていた。将棋大会とは別に、中には暇つぶしに将棋をしに来ている人もいたようだ。

映画研究部では、以前とったアンケートの結果から男女の俳優のベストテンや、新しい映画の紹介、ポスターなどの展示をしていた。中でも新しい映画の情報がみんなの関心を寄せていた。

山岳部では、山のことをスライド上映したり、登山に必要な用具を豆電球を使って、わかりやすく説明しようという苦労の跡が見受けられた。

意外だったのは、美術部は展示教室が南館の四階であまり目立たなかったせいか、見に来る人がとても少なかったことだ。たくさんのすばらしい作品があるというのに、もう少し絵に関心のある人がいてもいいのではないか。

今年の文化部展示は、全体的に華やかさに欠けていたようだった。そして、人気の集中している部とそうでない部の差が大きかったのではないだろうか。来年からは、工夫をして、生徒の目を引きつけるような展示を期待する。又、生徒の方も積極的に展示を見に行ってほしい。

クラス展示

参加クラス減る

クラス展示は、今年もいろいろな趣向を凝らしたものが催された。

三二三号室では、三年E組が「迷路の館」を行っていた。これは迷路プラスおばけ屋敷で、ここでは受付で線香をたいてススキを置いたり、テープを流したりしてムードを盛り上げていたようだ。そこには入るか入るまいか思案している姿が、よく目に付いた。

次に二三一号室では、二年H組が「おばけ屋敷」を行っていた。壁に張ってある案内の紙は、葬儀屋からもらった実物が使われていた。

これらの二つのおばけ屋敷の内容というとまさに、欲求不満のかたまりみたいなおばけが出没し、日頃のうっぷんをはらすというありさま。時々、女生徒の悲鳴が聞こえていた。

やはり、こういった自分で体験できる展示は人気があった。

次に三年A組のフィーリングカップル5vs5。これも人気が良く、会場は大勢の人の熱気でムンムンとしていた。入ったのはいいものの、今度は立ち見をしている人が多いので、踏み台なしでは見えないような状態であった。小さいわりには中味がよくできている機械をはさんで、五人ずつの男女二チームと司会者が和気あいあいとやっていた。しかし、あがってしまって質問を忘れたり、答えられなくなる場面もあったり、どもってしまうこともあった。そして成立したカップルは、口では拒んでもKISS……

恒例になったのど自慢大会は、相変わらず人気を占め、現在のヒット曲から少し前のヒット曲まで、一人で歌う人、仮装大会と間違えたような衣装で参加する人など出演する人は、十人十色だった。お祭り騒ぎでのっている出演者が多く、それにつられて、周りの観客もやはりのっていたようだ。熱心に声援を送る人も少なくなかった。

次に、これも毎度おなじみの喫茶店。しかしただの喫茶店だけでは面白くないと、ゲームを組み合わせるなど各クラスのカラーが出ていた。メニューはジュースからお茶漬け、ハンバーガー、クッキーと豊富であった。又、室内のムード作りに気を配っていたが、いまひとつゆきとどかない点もあった。

縁日は、二年C組が催していたが、その辺り一面は、なんともいえぬ甘い匂いが立ち込めていた。わたがしの味も水あめの味も、縁日そのものの味でなかなか好評だった。室内は、真っ暗な部屋を紫色などのセロハンではった電燈が、淡く風流なわたがし屋やヨーヨー釣り屋などを照らしていた。またその素朴さが快く思われ、好評であった一つの原因であろう。

しかし、全体的に今年は自治会展示があったため、飲食店に限らずクラス展示は、例年に比べて少ないのが目立った。

自治会展の参加の必要がない三年生の参加が多かった。そのせいか例年に比べて華やかさに少し欠けていたようだ。

閉幕祭

最終日を飾る

文化部展示の後、予定より少し遅れて、グラウンドに〝ダンシング・クィーン〟の曲が鳴り響いた。

フォークダンスは、初め参加者が少なく、すぐには開始できず、心配されたが終わりに近づくにつれ、参加者は増え、最後にはグラウンドに大きな輪ができた。しかし、今年は新しく〝セイリング〟が加わり、「踊り方がわからない」と言うこともあるせいか、またまだグラウンドの東側や、通用門の所で傍観している生徒も少なくはなかった。

この後、記念祭歌斉唱、学校長あいさつがあり、アトラクションが開始された。まず吹奏楽部の演奏で最近人気のある歌謡曲などを軽快に聞かせてくれた。また、司会者の進行もぎこちなさはあったが、吹奏楽部の部員にインタビューを試みるなど、曲と曲との間の時間を退屈させず、なかなか好評だったようだ。次に〝OBの川村ひさしさんを迎えて行なわれたオーディションで選ばれた五バンド〟による演奏であった。マイクの調子が悪く、中断してしまうなど心配させられたが、手拍子と紙テープや紙風吹の舞う中、華やかなステージで盛り上がった。また、暗くなり始めてステージがよく見えないため、急きょライトをつけるなどの処置がとられた。一部では〝内輪だけ盛り上がっていた〟という声もあったようだ。

この後、ファイヤーストームを囲んで、アトラクションパートIIを行なう予定で、ファイヤーストームに火がつけられた。しかし、マイクが届かないため、またもとの位置に移動して一度点火したファイヤーストームの火も消してしまうというハプニングも起こった。

アトラクションパートIIでは、三年C・D組ののど自慢大会の入賞者が歌を歌った。この後、ファイヤーストームを囲んで、自治会歌斉唱。芦高生にさまざまな思いを残して……。

こうして等三十四回記念祭は終了した。

― 閉幕祭が終了しても、すぐに帰宅しない生徒で通用門はいっぱいだった。

× × ×

編集後記

熱が冷める頃に取りかかり、忘れた頃に発行されるというのが芦高新聞の習慣となり、このスペースはその言い訳けの場となってしまったようです。

前号発行後、息をつく間もなしに記念祭が始まり、部員は再び取材に奔走しなければなりませんでした。前号編集と今号取材で、完全燃焼したせいか、記念祭後はみんな虚脱状態に陥ってしまい、そこへ芦笛の編集が始まったのです。取りかかるのが大幅に遅れてしまいました。「記念祭の新聞？　早いねェ」という悪友の皮肉が、どれだけ私達の繊細な心を傷つけたことか…。

二年生が携る新聞もこれが最後となり（わーい！隠居だ…あっ、芦笛があった）来年に備えてのオープン戦として、今号編集の大部分を一年生に任せました。

次代の芦高新聞もよろしくお願いします。

〈第36代出版部部長〉
二―H　山中　益美